

# 寂聴先生と祖母

瀬尾 まなほ

時が過ぎるのが年々早く感じるようになり、ふと気がつくと、今年も早、寂聴先生の三回目の命日を迎える。

もう1年が経ったのか、となんだかがつくり肩を落としてしまう。

先生の死後に生まれた次男は二歳になり、しゃべれるようになって、もうすぐ三歳を迎えるころにはオムツも完全にとれるだろう。次男の成長には感動と喜びを感じるのと同時に、一人の人間がここまで育ったのだから、その分の月日が確実に経っていることを痛感する。

時間が経てば経つほど、先生と離れて過ごす時間が増えていく。10年間、ほぼ毎日のように傍にいたのに、今ではもう遠い人になってしまった。それでも毎日想わない日は

ない。

携帯の中の写真アルバムには先生との写真がたくさん残っている。写真の容量が多く、携帯の空きが無くなって、私は先生の写真を消すことが出来ない。先生が構えず自然体の姿で、何気ない日々の様子を撮影したものが多く、それでももともと撮っておけばよかったと後悔する。

会えなくなつて3年が経ち、写真を見返すとそこには楽しかった思い出しかない。亡くなった直後は、先生の写真を見ることが出来なかった。悲しくて、辛くて、見ると涙が溢れていたからだ。それが今は見返すことが出来るようになって、先生との日々を懐かしんでいる。私のイキイキした笑顔を見ると、この時が一番人生の輝いた瞬間だった

と思う。

「日にち葉」とはどんな悲しみや苦しき月日が経つことで、悲しみを乗り越えることが出来ると関西ではよく言われている言葉だ。それは先生も法話で『忘却は神様が与えてくれた贈り物』だと話していた。先生との思い出はどれも絶対忘れたくないものばかりだけど、私がこの先、生きていく間にきつとその記憶も少しずつこぼれていつてしまうのだろうか。

先生が亡くなった後、翌年に17年一緒にいた愛犬のよるが亡くなり、今年には祖母が亡くなった。3年続き、大切な存在を失い、大往生した3人だから自分の中でなんとか納得できるものの、やはり堪える。先生が晩年、自分の親しい人が先に逝ってしまう度に「なんで私は死なないんだろう」とぼやいていた。長生きすればするほど人の死を経験することになるのは、宿命かもしれない。

私の亡くなった祖母はいくつもの病気を抱えており、最期のほうはいつもしんどそうだった。手先が器用で料理や手芸が得意であった祖母は、毎年干支のぬいぐるみの置物を作っていた。寂庵にも飾るように毎年贈ってくれ、先生も「本当に器用で上手よね。どれもかわいいし」と褒めて

くれていた。私が日本海に住む祖父母の家に休みに帰ると、「まなほは優しい。おじいちゃんやおばあちゃんのところに戻る若者なんているの？まなほは休みになればよく会いに行ってる。本当そこだけは感心する」と毎回褒めてくれた。私が先生のもとで働くようになり、祖父母も大喜びで、自慢の孫となった。先生が私たち家族を幸せにしてくれた。

向上心があり、努力家のところは先生と祖母もよく似ていて、二人とも一瞬たりとも時間を無駄にしたくなかった。祖母は身体がうまく動かなくなつて、精神的にもつらかったと思う。手がリウマチで曲がってしまったて箸も上手に持てなくなつてしまっていた。

冬は寒いので帰省することを控えており、暖かくなつたら会いに行くと電話で言っていたのに、結局亡くなる五月まで帰ることが出来なかった。

祖母は急変し、その翌日病院で息を引き取った。突然のことでも誰かが予想していなかった。ここ数カ月は体調が悪かつたので手芸も辞めてベッドで横になっていたと思ひ込んでいた。祖母の死後、二階にある祖母の手芸部屋に行く、クリスマスの手芸の大作が机一面に広げられていた。

それはまだ最中のものであった。どうやってあの状態で二階へ登ったのか、這うようにして上ったに違いない。祖母がつい最近までここに座って裁縫をしていたことがわかり、涙が出た。

寂聴先生も最期まで諦めていなかった。よりよいものを書きたいという精神を持ち続け、ペンを離さなかった。病気をし、入院生活が続くと「こんな生産性のない日々が嫌だ」と嘆いた。それはきつと祖母も同じだったに違いない。一瞬たりとも無駄にしないこと、何かをし続けること、自分を見限らないこと。それを最期までつらぬき通した。

亡くなった人たちは、時が経っても私に大切なことを教えてくれる。私がそのとき気づかなったことが、今となつて感じることもある。私はこれからも寂聴先生から教えを受け、学び続けるのだろう。